

# 宮良ルりさん

1926(大正15)年8月16日生まれ  
沖縄県石垣島

所属 ひめゆり学徒隊  
(沖縄師範学校女子部)  
沖縄陸軍病院



戦地 南風原(はえばる)～伊原(現糸満市)

## ●1944(昭和19)年9月 石垣島に長期帰省中、学校から戻ってくるよう電報が届く

どうしようかということで、親たちだけで集まりを持ったり、私たちだけで集まりを持ったり、親子一緒に集まりを持ったり、なかなか結論が出なかったんです。一高女の生徒は戻らないことに決まったんです。けれど師範学校の場合は国立ですから、国から月に25円、大金ですよ、を貰っていましたので、帰らないとそれを国に返さないといけな。私は父を亡くして母と妹の3人でした。母がどんなにやってもお金を返す力はないと思いました。それで私の方から学校に戻ると言ったんです。その時の母のほっとした様子と、これだけのお金がつくれず戦場になるようなところに娘を返さないといけなのかというような自分のふがいなさの思いが、とっても辛かったです。

## ●1945(昭和20)年3月23日 沖縄陸軍病院看護要員として学校から南風原に移動

最初空襲があり、いよいよ沖縄が戦場になるというとき。10時ごろですか、沖縄師範学校女子部157名、第1高等女学校65名の生徒が、18名の先生に引率されて学校から南風原に向ったんですね。

最初は外科、内科、伝染病科だったんですが、米軍が上陸してどんどん負傷兵が増えてきてからは、第1外科が元々の外科です。内科は第2外科、伝染病科は第3外科に変わり、私は外科から第3外科に配置換えに。

看護婦さんは技術を持っているから中での仕事が主ですね。飯上げに行ったり、水汲みに行ったり、排泄物を捨てに行ったり、死体を埋葬したり、雑役は生徒がしていました。包帯を準備したり綿棒を作ったり。

## ●1945(昭和20)年5月25日 南風原の壕から伊原へ撤退

南部に撤退しないと米軍が、第3外科壕の場合は600m弱まで来ていると、撤退命令が来て、重症患者は壕に残しておけ、衛生兵が運ぶから、君たちは独歩患者だけを連れて撤退しろと言われて、その言葉を信じました。この負傷兵たちは一刻も早く私たちと一緒に南部に撤退したかったと思います。上の段からずり落ちたり、這いずって壕の入口に出て来て、「学生さん、どこに行くんですか」「学生さん、連れて行ってくれよ」とすがり付いて来たんですよ。でも、第3外科の場合は将校が日本刀をひき抜いて「重傷患者を連れて行くと叩き切るぞ」と言っていました。どうすることも出来ませんでした。また私たちには連れて行くだけの余裕もなかったんじゃないかと思います。「皆さんはトラックで運ばれます。私たちは歩いて行くんですよ。皆さんの方が先に着きますよ」という言葉を残して、歩ける負傷兵を連れて、わずかばかり残された衛生材料を持たされて、南部の方へ撤退したんですね。

## ●1945(昭和20)年6月18日 解散命令

18日の晩解散命令。誰が言い出したか、この壕を出たらみんな散り散りで死んでいくんだから、生きてる時にお別れ会をして出ようと言ったんです。みんなそれに賛成しました。真っ暗い洞窟の中で、死を覚悟してお別れ会が開かれたんです。浪花節の上手な上間道子さんがトッパッターに立ちました。次に先生方が次々歌われて、みんなで校歌を歌い、「海行かば」という軍歌を歌い、最後に「ふるさと」を歌ったんです。涙が溢れてもう歌えません。

それが終わって壕を出ようとした時に、兵隊が「足音が聞える」って言ったと思うと登って行って「敵だー！」と降りて来たんです。しーんと静まりかえったんです。じーっと息を殺していました。「兵隊はいないか」「住民はいないか」何度も呼びかけがあったんです。出て行こうとしない。捕虜になるなど強く教えられていたんです。親兄弟、末代までの恥だと言われていた。そんなにされるよりは死んだ方がいい。「この壕は爆発するぞ、いいか」と言っても出ていかなかった。ぱぱぱーんと爆弾が投げ込まれたんです。真っ白い煙がもくもくと立ち込めて、一寸先も見えない。みんなそこにのた打ち回った。私も苦しくて苦しくてたまらない。「お母さん助けて、お父さん助けて、玉代勢先生、助けて」言え言えほど苦しい。叫び続けているうちに、気を失ってしまったようですね。後で聞くと、私は死体の下敷きになっていて、そこから「水、水」と首をもたげて来た。玉代勢秀文先生が生きてらっしゃって、下敷きになっている私を引っ張り出して、ぱぱぱーんと顔を叩いて「生きてたか、生きてたか」。(取材日:2008年1月25日)